

優秀作品賞

「私の父」

山下 菜香さん

父はとにかく明るく前向きな人です。私が小学生のとき、父は健康診断で糖尿病だと診断されました。父の場合初期でしたが診断後、父は煙草を一切止めました。食事の内容や量も母と一緒に病院の講座に参加し、栄養士さんにかから教わっていました。ご飯一膳の量は100gを厳守。大好きなお酒は、缶ビール350ml1本を母と半分こ。あんなに好きだったお酒を減らしても「お母さんと半分こするビールは格別だ」といつも笑顔でした。文句や不満を言う父を私は一度も見たことがありません。栄養士さんから教わった料理を実践し味付けを工夫する母にいつも「お母さんありがとう」と言い、私や姉にも「みんなで食べるご飯はおいしいね」とよく言っていました。糖尿病は恐ろしい病気ですが、初期の診断だったため、父だけでなく家族全員の食生活や生活習慣を見直すきっかけとなりました。家族そろって朝食や夕食を食べる回数が増え、家族の会話や笑い声が増えたのも確かです。

父はとにかく真面目な人です。私が中学生のとき、父は大腸癌を患いました。しかし、健康診断のおかげで早期発見でした。突然の癌宣告に、母も姉も私も不安な日々を過ごしましたが、手術は無事成功。手術日が4月4日だったため、毎年その日は手術成功の記念日になりました。父はめったに風邪もひかず体力には相当な自信をもっていました。それでも健康診断は真面目に毎年欠かさず受けていました。父の決め台詞は「健康診断は家族を守るオレの義務だ」。親指を立てて「にかっ」と笑いながら言うのも毎年恒例です。もしもあのとき健康診断を受けていなければ、と考ただけで非常に恐ろしいです。家族の穏やかで平

和な日常を守ってくれるものが健康診断であると強く感じています。

父はとにかく強い人です。おととしの健康診断で父は「胆管癌」を宣告されました。末期でした。気づいた時には遅く、家族全員集められ、余命半年とはっきり宣告を受けました。医者の説明を母も姉も私も泣きながら、ときに「なんで、なんで」と怒りながら聞き、しかし父だけは黙って静かに聞いていました。父は、毎年必ず健康診断を受けていました。今まで「糖尿病」も「大腸癌」も早期発見でした。健康診断とは、早期発見のためにあるのではないのか、なんのために健康診断を毎年受けていたのか、医者はちゃんと見ていたのか、とそのとき私には悔しさと腹立たしさしかありませんでした。父に「健康診断毎年受けていたのに、なんで医者は見つけられなかったんだよ。それでも医者かよ」と感情をぶつけると、父は落ち着いて言いました。「胆管癌は見つけにくい癌だから仕方ないよ。お医者さんも看護師さんも頑張ってくれているから失礼なことは言っちゃいけない」。さらに、本人が一番辛いはずなのに、こう言うのです。「健康診断のおかげで、半年前から分かったんだから、感謝しないとね。父さんはこれからは希望をもって生きるよ。だからこれまでのことを後悔するよりも、これからの家族との時間を大切にしよう」。父の強い言葉は絶えず私たち家族を引っ張ってくれます。その後、県外に嫁いだ姉もしばらく実家に戻り、久しぶりに家族4人で過ごしました。家族全員で初めて映画館で映画を見ました。映画を見ながら、つい父のことが気になって、絶えず横目で父のことをちらちら見ていたのを覚えています。また、父の誕生日は家族皆で父のリクエストのすき焼きを食べ、ケーキにはろうそくをたくさん立てて「ふー」と消し、大拍手の中でお祝いできました。体力がだいぶ落ちていたころ、桜が見たいと言っていた父は車いすに乗って病院の最上階から満開の桜を家族とともに見ることができました。そしてその2日後です。69歳で亡くなりました。父は1日でも長く生きようと頑張り、抗がん剤や放射線治療など辛い治療にも、何一つ文句を言わず全

力で挑み続けました。余命半年と宣告を受けましたが、宣告後1年と4か月一緒に歩んでくれました。

父はとにかく家族思いの人です。そして私が一番尊敬している人です。今私の手元には「道標（みちしるべ）」というノートがあります。母、姉、私に一人一冊ずつ父が病床で少しずつ書いてくれたもので、父の葬儀後、母から受け取りました。私の「道標」には、「お母さんをずっと大事にしてほしい」「お姉ちゃんと助け合って生きてほしい」などの願いや「災害が起きたらどうするか」といった家族が困らないように導く内容が、細かく丁寧に書かれています。父の溢れんばかりの気持ちが綴られていて、私の一生の宝物です。その中に、ことさら丁寧な字で書かれているものがあります。「健康診断は、家族皆毎年受けてほしい」。父の願いは絶えず最後まで家族に向けられていました。「父さん、大丈夫だよ。ちゃんと受けるよ。約束するよ」。父は今日も天国から私たち家族を見守ってくれています。